

Title	ビンゲンのヒルデガルト：－女子修道院長の生涯と作品
Sub Title	The life and works of Hildegard of Bingen
Author	上條, 敏子(Kamijo, Tosiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.4 (1996. 6) ,p.113(437)- 126(450)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960600-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビンゲンのヒルデガルト

——女子修道院長の生涯と作品——

上條 敏子

本稿は、作品を軸にビンゲンのヒルデガルトの生涯の整理を試みようとするものである。ビンゲンのヒルデガルトは、一〇九八年に生まれ、一一七八年に死んだ。彼女の著作は、中世史の基本史料集パトロロギア・ラティーナの丸々一巻を埋めており、中世の著述家としては、まず、多作の部類にはいる。しかし、その再発見と再評価は比較的最近までまだなればならなかつた。ヒルデガルトの名が忘却のかなたにおしゃられていたため、ヒルデガルトの名が唱えて、真理の現れるひとを析る習俗が示すようだ。ヒルデガルトは伝説的人物としてなら、長く記憶されてきた。しかし、その素顔は、神秘のヴェールに包まってきた。

*

ヒルデガルトは、一〇九八年にメヒテイルドを母、ビ

ビンゲンのヒルデガルト

ルデベルトを父として生まれた。コットフリートの伝記は、父母について、多くを語っていない。ただ、Qui, licet mundanis impliciti curis et opulentia conspicui とあり、宫廷に関する高貴の家に生まれたとある。ヒルデガルトの両親は自由貴族であり、家門の拠点は、マインツ司教区のアルゼー Alzey 近郊のブルマースハイム Bermersheim にあつた。他方、ギベールの伝記には、ヒルデガルトは、誕生の時から十分の一税として奉納されるべく定められたとある。この記述からヒルデガルトは十人兄弟の末子であったとする見解があるが、実際に確認されてくるのは、ヒルデガルトをいれて八人までである。

当時は、使徒の清貧への回帰をもぐらむシトー会の修道院改革が既に胎動していた。だがドイツでは、ヒルデガルトは、既に胎動していた。だがドイツでは、ヒルデガルトは、既に胎動していた。

ベネディクト会修道院の貴族色が依然濃かつた。他方で現世の放棄としての禁欲の倫理は有力家門に強い影響力をもつていたから、シエボーハイム伯の娘ユッタJutta が、一一〇六年にティエジボーテンベルクでの隠遁生活に入つたのも、ハルツ事件ではなかつた。ヒルデガルトの両親は、娘をユッタに託す。このときヒルデガルトは、八歳。以後、ヒルデガルトはユッタの元で養育される(3)になつた。

伝記には、ティエジボーテンベルクにおける生育環境についてのかかりは薄く研究者の理解は、混乱している。フランガンは、ある箇所では、ヒルデガルトらの生活環境を、食物を差し入れるための小窓があるが中からは開かない閉められた小屋としてイメージしている。別の箇所では、ユッタの生活は修道士の生活の日課にほぼ沿いつたのであつたと仮定している。あるいは別の箇所では、Fontevrault 修道院にならへられてゐる(4)。

伝記には、八歳の時におりたりふせ consepielienda Christo, ut cum ipso ad immortalitatis gloriam resurgeret, recluditur in monte Santi Disibodi つかひ、キリストとゆき復活して不滅の栄光をへけるべく聖ティエジボー ドウス山に森られたる。ユッタは、de-

vota femina ふるわね、その役割にてこゝせ、 quae illam sub humilitatis et innocentiae veste diligenter instituebat, et carminibus tantum Davidicis instruens, in psalterio de- cahordo jubilare praemonstarabat. とあり、ヒルデガルトは、タガイテの謡と十弦の琴の奏法を教えたと読める。そのほかの教育にてこゝせ、 Caeterum prater sim- plicem psalmorum notitiam, nullam litteratoriae vel musi- cae artis ab homine percepit doctrinam うめつ、簡単な詩篇の知識をハルト、文法学、音楽理論をひとから教えられたハルトはなかつた。他方、quamvis ejus existent scripta non pauca, et quandam non exigua volumina ふるわぬハルト、書物は膨大な量があり、好んでだけ読むハルトができたとみられる。

これ、ユッタの隠遁生活の家は同じような女性の集まる修道団体へと発展し、ティエジボーテンベルク修道院に監督されるベネディクト派修道院となつた。ヒルデガルトは十代で誓願をたて、バンブルク Bamberg 教オットー Otto からホールを授かつたことがわかる。しかし、その後一一一六年まで、ヒルデガルトは、人々が聞くとはなし。ハルトが死去し、かわつてヒルデガルトが女子修道院 magistra に選出され

れた。

この時まで、ヒルデガルトの人生は一見、平穏無事であった。しかし、彼女の内面の生活は一貫して神秘に満たされていた。⁽⁶⁾

後の回想によれば幼少のヒルデガルトは、病氣がちで風変わりな子供であった。ヒルデガルトには、まわりの人見えないものが見えた。また、未来がよめた。そして、彼女の視覚世界は、つねに奇妙な光に満たされていた。

この光は、のちにヒルデガルトが「生命ある光の反射」*umbra viventis lucis*と名付けるものである。この光のなかにヒルデガルトは、様々な形象を知覚した。形象は人間から精巧な建築物まで多様であり、いざれヒルデガルトはそれらを「天からの声」の助けをかりて解読することになる。ついには、ヒルデガルトは、時に、より大いなる光と接触する」となるが、これがヒルデガルトの言葉による「生命ある光」*viventis lucis*であった。

このした幻視体験*visio*は、幼児期からのものであつたが、ヒルデガルトはユッタやヴォルマール Volmar のほかには、そのことをうちあけていない。ヴォルマール

は、ヒルデガルトの教育役であり後にヒルデガルトが幻視の書を著すようになつてからは書記役として身近にあつた修道士である。⁽⁷⁾

ヒルデガルトがはじめて光を体験したのはのは三つの時であった。また、ヒルデガルトの幻視には、形状不定のまたたくようなきらきらした光、同心円状の輪、繰り返しあらわれる「要塞の形象」がみられる。これらのことはヒルデガルトが病氣がちであったことを考えあわせて、ヒルデガルトの幻視には身体的な条件に何かがあった、と考える研究者もある。シンガーまた、比較的最近ではザックスが、ヒルデガルトは偏頭痛の一種である scintillating scotoma による閃光をみていたとしている。ただし、病氣がちであつたとはいえヒルデガルトは八十歳の天寿を享受しており、その活動は晩年も衰えていない。他方、ヒルデガルトは「心身ともに完全に目覚めた状態で」幻視をみたことを常々強調していた。⁽¹⁰⁾ ニューマンは、この点を重視して、ヒルデガルトの幻視体験が憑依、忘我、トランス状態によるものであつたとは考えられないとしている。また、ヒルデガルトには幻覚状態をつくる原因となるような極端な断食、苦行、長時間にわたる祈祷を好んだ形跡はない。以上より、幻視体験は、

身体的条件にヒルデガルトならではの気質が加わったところに生まれた、と考えうる。

だが、幻視の実態が何であったかは、さしあたり問題でない。問題はそれが転機となつた、ということである。女子修道院長就任から五年後の一一四一年、ヒルデガルト四三歳の時、天命がくだつた。『道を知れ』*Scivias* の序で、ヒルデガルトはこの時の体験について記している。燃える光が彼女の心と頭の全体に充满し、ヒルデガルトは聖書を理解した。そして、光に続いて、幻視として見、聞いたことを「述べよ、そして記せ」との天命が下つた。現代の歴史家は一二世紀というと修道院改革の熱狂に包まれた時代を思い描きやすい。しかし、ヒルデガルトの理解は違つた。ヒルデガルトのみた同時代は柔弱な時代、聖書はないがしろにされており、聖職者は手緩く愚鈍、人々はものを知らなかつた。そこで、ヒルデガルトに下つた使命とは、聖職者が司祭のカリスマによつてはなしえなかつた教え、諭し、聖書を解釈し、神の正義を宣言することを、予言者のカリスマによって行うことであつた。⁽¹²⁾

啓示から一〇年をかけてヒルデガルトは、幻視集『道を知れ』*Scivias* を完成する。ヴォルマールと修道女リ

ヒヤルディス Richardis の協力を得ての作業であり、執筆にあたつてのヴォルマールの役割はかつては実質的な執筆者と考えられたこと也有つた。しかし、現在では、ヴォルマールはヒルデガルトのラテン語をなおす校訂役であり、著作に内容的な変更を加えることをヒルデガルトは許さなかつたと考えられている。⁽¹³⁾

『道を知れ』は、二十六の幻視にもとづいており三部構成をとる。各部分の主題は、創造主と創造、贖罪者と贖罪、救済史であり、それぞれの幻視の形狀の簡単な描写の後に、その隱喻が解きあかされる。⁽¹⁴⁾

一一四七年から一一四八年にかけて、『道を知れ』の脱稿間近であつたヒルデガルトに幸運が訪れる。ヒルデガルトの幻視の噂は、ヴォルマールから、マインツ司教ハインリヒを経て教皇庁に報告されていたが、時の教皇エウゲニウス三世は、シトー会出身、クレルヴォーのベルナルドゥスの門下であつた。一方、ヒルデガルトは、ベルナルドゥスに書簡を送り、天命についての判断をおいでいた。折しもトリリアー宗教會議に出席中の教皇エウゲニウスは、「ヒルデガルトにみるような偉大な光は隠されておくべきではない」との進言をベルナルドゥスからうけることになる。教皇は、ディジボーデンベルク修道

院に使者を送り、当時未完であった『道を知れ』の写しをとりよせて、参会した司教の前に読みあげたと伝えられる。そして、エウゲニウスは、ヒルデガルトに挨拶と祝福を述べる書簡を送る。

*

一一四一年を第一の転機とすれば、トリアー宗教會議は、第二の転機であった。教会の最高權威者たる教皇に認められたことで、迫害と中傷の危険は去る。ヒルデガルトの知名度はあがり、人々は彼女の助言を求めるようになつた。ドイツ皇帝フリードリッヒ・バルバロッサから、一介の婦人まで、ヒルデガルトは、実に多様な人々と交流をもつ。

ヒルデガルトのいたディジボーデンベルク修道院には、巡礼がおしそせた。また、修道院への入会を希望する女性も増加した。宗教會議と前後して、ヒルデガルトは、ディジボーデンベルクを出立し、新修道院を設立せよとの啓示をうける。幻視のなかで示された移転場所は、ルーペルツベルク Rupertsberg、ナーエ河とライン河の合流点に近い人里離れた山の中腹であった。そこにはカロリング期の聖人ルペルトウスの母の設立による修道院が荒れたままになつており、ヒルデガルトは、それを再

建しようと考えたのである。しかし、移転計画には、ディジボーデンベルク修道院長クノ Kuno をはじめ強い反対があつた。⁽¹⁹⁾ また、元来修道女のためにディジボーデンベルクに寄進された土地を、改めて分与してもらわねばならないという問題もあつて、完全に独立するまでにヒルデガルトはクノと争わなければならなかつた。⁽²⁰⁾

独立を決意した理由は様々に憶測されているが詳細は不明である。⁽²¹⁾ 少なくとも、巡礼と寄進、修道志願者をひきつけていたのは、ヒルデガルトのカリスマであつたから、ヒルデガルトがディジボーデンベルク修道院——修道士の代表を大修道院長として戴く——から独立してもやつていける、と判断したとしても不思議はない。いずれにせよ、ヒルデガルトの決意は固かつた。ヒルデガルトは、伯妃リヒャルディス Richardis von Stade の人脈により、マインツ大司教ハインリヒの後押しを得る。ところが、クノがあくまで独立に難色を示すのでヒルデガルトは寝込んでしまう。ヒルデガルトの身体が石のようになりのを確認したクノは、出立を神の意志と知り独立を承諾したと伝えられる。⁽²²⁾

新修道院の建設は一一四八年に始まり、一一五〇年に移転が実現した。一一五二年には、聖堂獻堂式もおこ

なわれている。当初十八人であつた修道女は、その後順調に増加したらしく、一一六五年頃にはライン河対岸のアイビンゲン Eibingen に支院を建設するまでになつた。⁽²³⁾ 移転は成功であつた。しかし、ヒルデガルトが実践しようとした修道生活は一部に不評であり、離反者がでた」と、とりわけ、目をかけていたリヒャルディスが、女子修道院長就任のため遠くブレーメンに去つた」とヒルデガルトの苦悩は深かつた。ヒルデガルトは、捨てられたと感じ、裏切られたと思つたらしい。嘆くだけでは母シュターデ伯妃を非難し、マインツ大司教さらに教皇にまで修道院長選挙は無効と訴えでる始末であつた。だが、リヒャルディスは、ヒルデガルトの下に戻ることなく死んだ。⁽²⁴⁾

一一五三年ヒルデガルトは、さらに庇護者を失う。マインツ大司教ハインリヒが教会財産横領により司教職を解かれたのに続いて、ベルナルドウスと教皇エウゲニウスが崩御したのである。

しかし、一一五〇年代のヒルデガルトが失意に沈むばかりであつたかと言えば、そうはいえない。この頃の作品には『聖ルベルトゥス伝』、『交響曲集』*Symphonia'*

宗教劇『オルド・ヴィルトウートゥム』*Ordo virtutum*、謎の言葉集『リンガ・イグノータ』*Lingua ignota*など、自ら率いるルペルトウスベルク修道院を念頭においた仕事が多くみられる。当時のヒルデガルトにとって、修道院の基礎を固めることが急務であつたことをうかがわせる。他方で、一一五〇年代には、対外的にも交流が広がりつつあつた」と書簡集は証言する。ヒルデガルトが自然科学系の書物二編を著わしたものと同じ頃である。『簡単医学の書』*Liber simplicis medicinae* もしくは『創造物の様々な種類の細目について』は、当時の科学的知識を百科全書的にまとめており、四つの書が動物に、二つの書が薬草と樹木に、三つの書が宝石、金属そして諸元素にあてられていく。これと対をなす『複合医学の書』もしくは『病気と治療法』*Causae et curae* は、病気と治療法についての体系的な記述であり、アダムとイヴについての様々な伝承、占星術についての記述を含む。⁽²⁵⁾ これらの書の執筆にあたつてヒルデガルトは啓示の働きを問題にしていない。また、写本を流布させようとした形跡もみられない。かつ、ヒルデガルトの死後に編纂された作品集にもこれらの作品は収録されていない。ヒルデガルトには治癒の奇跡をおこなつたとする伝承がある

」とから、医学書には、ヒルデガルトが個人的に参照する実用的目的があつたとみられる。

新修道院の運営も軌道にのつたとみられる一一五八年以降ヒルデガルトは、五年間で三回の説教遠征にする。

旅程にはライン河とマイン河沿いの修道院などが組まれ、ケルン市とトリアー市では默示録を思わせるおどろおどろしい講話が披露された。平行して、新しい幻視集『人生の功德の書』*Liber vitae meritorum* の執筆も進められた。この作品は、ヒルデガルトの幻視集三部作の第二作にあたり、徳にいたるための心理的葛藤と贖罪が主題である。⁽²⁷⁾

ヒルデガルトはこの頃既に、幻視集の第二作『神の業の書』の執筆にかかっていた。そこには、ヒルデガルトの宇宙観、歴史観、終末観が最も成熟した形で表現されている。そして、この作品は、終結部の默示録的な預言ゆえに後世にわたって注目された作品でもあった。⁽²⁸⁾

『人生の功德の書』を仕上げた時ヒルデガルトは六五歳になつており、健康状態は常に不安定であった。生來の才知は長い人生をへて鍛えられた意志と支え合い、晩年のヒルデガルトは預言者としての強い人格をみせるようになる。ことに、フリードリッヒ・バルバロッサとの反目は知られたエピソードである。一一五〇年代のヒルデガルトは、インゲルハイム宮に招かれて皇帝の未来を占つた」ともあつた。フリードリッヒからは、一一六三年に修道院の自由を保証する特許状が発行されている。問題は、教皇選挙にあつた。ハドリアヌス（一一五四—

どまり、秘書役と主席司祭役をつとめた。一一七八年、ヒルデガルトの生涯でおそらく最も暗い事件がおこる。破門された貴族を修道院墓地に埋葬したことがもとで、ルーペルツベルク修道院に聖務停止令がくだったのである。マインツの高位聖職者は、遺体の掘り起しを要求した。ヒルデガルトは死者は埋葬時には破門を解かれていたとして応じなかつた。このために、修道院は、六箇月にわたつてミサ、サクラメント、聖務共唱を禁止されたのである。ヒルデガルトは、停止令解除の数箇月後に生涯を閉じた。この事件をめぐつてやりとりされた書簡は、ヒルデガルトの心の奥底にふれる作品となつており、音楽論と修道院生活におけるその意義についての弁明書ともなつてゐる。

没後、ヒルデガルトの名は、預言者として長く記憶された。しかし、幅広い知識をもつた著作家、修道院の生んだ神学者、才能ある作曲家としての側面は、早々に忘れ去られる」とになる。ハト一念の一修道院長エーベルバッハのゲベノ Geben of Eberbach は、一一一〇年ヒルデガルトによる預言の選集 *Speculum futurorum temporum* もしくは *Pentachoronen* を編み、非常に読まれた。そのため、預言者ヒルデガルトの名前は、後代まで残る

ことになる。後になると、ヒルデガルト自身の著作はあまり読まれなかつたがゲベノによる選集はよく読まれたからである。フランドルの神秘主義者ハーデウイヒも、ゲベノの著作により、「あらゆる幻視をみたヒルデガルト」 Hildegard die alle die Visionen sach を知つていた。そして、やや後になると、すでに輪郭がかすんだイメージに中世末期の「聖女」のイメージが重ねあわされるようになり、ヒルデガルトと言えば神秘主義者であり、忘我の発作があつた女性として受けとられるようになる。⁽³²⁾

その後、ルネサンス期になるとユマニストが新しい関心からヒルデガルトに着目した。シュポンハイム修道院のトリテミウス Trithemius (一四六一—一五一六年) がヒルデガルトの生涯についての熱はつめつてゐるが内容はだいぶ怪しい報告を書き、一五二一年には『道を知れ』の最初の印刷本も出版された。それに、一五二七年に、アンドレアス・オジアンダー Andreas Osiander が、聖職者の怠慢にかかる予言をとりあげてヒルデガルトを、プロテスタンントの先駆者にまつりあげた。そして、それには時代が進むと、ヒルデガルトは作品を書かなかつたことにされてしまひ、一連の作品の実際の著者はヴォルマールか、あるいは別の男性であるといつゝことになつ

てしまつた。このため、十九世紀の末のプレーガー『中世ドイツ神秘主義の歴史』や、シュメルツァイス『ヒルデガルトの生涯と作品』では、ヒルデガルトは、天から聞こえたラテン語を意味も解かずいつていていた、と説明されたのである。

ヒルデガルトの再発見は、今世紀の研究によつてゐる。そして、研究が進むにつれ、ヒルデガルトの女性神秘主義家の固定したイメージも崩されていく。

虚像から実像へ、ヒルデガルト再評価にあたつて、決定的な役割を果たしたのが、シユラーデルとフュールケッターの『聖ヒルデガルトの書物の真性⁽³³⁾』(一九六五年)のほか、リーベシュツ、ヴィドマー、シッパー⁽³⁴⁾ゲス、ドロンケによる一連の研究であつた。現在、ヒルデガルトの作品と生涯が知られてくる一方、解放された女性、フュミニスト、エコロジストなどの新しいイメージも醸成されつつある。中世、そしてルネサンス期が時代の求める女性像をヒルデガルトにおしつけたように、現代社会も、時代が望むヒルデガルト像を構築しつつある。ニューマンが指摘するように、聖人像の構築はつねに無意識の共謀である。聖人の生涯は、聖人の生まれおちた時代と聖人を崇敬する人々の共同作業として語られ

続ける。⁽³⁵⁾

(1) ヒルデガルトの生涯についてナムコート著「ヒルデガルトの生涯と書物」Vita 及び Acta 並 Migne, J.-P., ed. *Patrologiae cursus completus ; series latina.* 1855. 197. col. 91-140. 年表「Vita」PITRA, J. B., Analecta S. Hildegardis vol. 8 of *Analecta sacra 407-14* に掲載。また「Vita」のせか題連記事^ア AASS September, vol. 6, 629-701; Mainzer Urkundenbuch, ed. P. Acht, vol. 2, pt.1 (Darmstadt, 1968); Annales Zwifalenses maiores ad 1141, (MGH.SS. 10, p.56); Vita S. Gelaci 8 AASS. January 5; Chronicon Alberici ad 1141, 1153 (MGH.SS. 23, p.842); Gesta Semeniensis Ecclesiae IV. 15 (MGH.SS. 25, p.306); Vincent of Beauvais, *Speculum historiale* 27. 83 ad 1146 (Douai, 1624; rpt. 1965) 並みに^ア 十日半の年表^ア 諸^ア テニ^ア ハベヌ^ア 諸^ア カテ^ア ハス^ア カテ^ア ハス^ア。Chronicon Hirsangense ad 1149, 1150, 1160, 1180; Chronicon Sponheimense, 1136, 1148-1150, 1179, 1498; Catalogus illustrium virorum Germaniae, p.138; De scriptoribus ecclesiasticis, p.281, all in *Opera historica*, ed. Marquand Freher (Frankfurt, 1601; rpt. 1966) NEWMANN,B., Sister of Wisdom. St. Hildegard's Theology of the Feminine, 1987, p.5. note.11. #6 た Mathew Paris, *Chronica majora*, ed. LUARD, H. R., 1880, p.195 やセ頃^ア 著^ア ヒルデガルト^ア 田原^ア も^ア カ^ア 跡^ア ジョウ^ア カ^ア くれた^ア 朝^ア 申^ア 国^ア 聖人^ア のひまつむつ^ア し、カハタ^ア フー大司教 S. Edmond of Abingdon 靈^ア 神^ア Robert of

- Knaresburg' 聖女エリザベス St. Elisabeth of Hungary
 ル・ド・ブルボンの聖ヘリヤ文庫は
 LEWIS, G. J., Bibliographie deutschen Frauemystik des
 Mittelalters, 1989, pp.66-145. むる語ふねだ。

(vi) PL. 197. col.92-93. FLANAGAN, S., *Hildegard of Bingen, 1098-1179. A Visionary Life*, 1988, pp.22-24; p.215 n.8.

(vii) PL 197, col. 93.

(viii) FLANAGAN, S., op. cit., pp.16-40. esp. pp.28-29, p.322, p.382.

(ix) PL. 197. col. 93. ハシタゼ Sponheim と Meginhard の姉妹。indocta mulier 黒糸の女性である。Vita, Berlin, Staatsbibl. Lat. Qu. 674, fol.7rb. Editedin DRONKE, P., *Women Writers of the Middle Ages: A Critical Study of Texts from Perpetua (†203) to Margerite Porete (†1310)*, 198. p.22. ルートガルトの小説「船の織機」にて、貴族の女性が小舟へ船をたしなむ。一般船でユルトガルトは小舟へ船に織機をもつたが、聖職者には小舟へ船の織機を行なうたたぬ。田舎へだらけ。

GRUNDMANN, H., *Die Frau und die Literatur in Mittelalter*, p.135. ルートガルトは、彼の織機はもじかねはるべく同じ様の織機を購入する。FERRANTE, J., *Public Postures and Private Maneuvers: Roles Medieval Women Play, Women and Power in the Middle Ages*, ed. by Mary ERLER, Maryanne KOWALESKI, 1988, p.224. ルートガルトは

(x) ルートガルトは、彼の視力の発揮による体験、視力を用いてみるねだらけを書く。Vita, Berlin, Staatsbibl. Lat. Qu. 674, (云々 Vita ルートガルト) fol. 6vb. Edited DRONKE, P., op.cit., p.231, see also, p.146.

(xi) ルートガルトは、幼少の頃から「みだら」を簡単にしてしまう。人を不思議がるやうだ。しかし、ある晩、

自分にはみやいふるものが人にはみやない」と知つて、極力口をつぐむよくなつた。ただ、ついたまらず話してしまはへじゆあつて、そんな時は幻視の力が消えてしまふと、顔を赤らめ、泣き出やうじがあつた。しかし、大抵は黙つてゐる人が多く、人見知りする性格でもあつたため、どのよひにしてかおどは説明しなじだ。ハシタだけは、氣づいて修道士に話してゐた。Vita, fol.7ra-7rb.

- (6) Ch.ハガー著、平田寛記『魔法やく神跡』1九六九年、社会思想社(SINGER,C., "The Scientific Views and Visions of Saint Hildegard." *Studies in the History and Method of Science* I, Oxford, 1917, pp.1-55 reprinted in *From Magic to Science*, New York, 1958, pp.199-239, esp. p.230-4.) ; SACKS, O., *Migraine: Understanding a Common Disorder*, Berkeley, 1985, pp. 106-8. ハガーによれば、『頭痛歌』(『スキャビアトベ』) の脚本中の挿絵は、身体と顔面をのぞけば、偏頭痛の患者が発作中じみだぬの挿写の體似である。DRONKE,P., op.cit., p.147.
- (10) 意識が薄れた時の状態で幻視をみたことによれば、例えせばヤハヅルのキヅルくの書簡で明記されることは、KRAFT, K., *The German Visionary: Hildegard of Bingen, Medieval Women Writers*, ed. by K. WILSON, 1984,p.123. 痛のやうな幻視visionをみてる問題、外界の映像をみてる。Vita, fol.7ra.
- (11) NEUMAN, B., *Introduction*, Scivias, p.12. ユルトガルトは、愚痴の脚本をだした書簡がある。「母の娘よ。
- (12) 因〇穢を禦ゆだ原がいシルトカヘルせ、穢モ既たり聞こたりしたるを述べよとの圧力を強く感じねばならなかつた。
- (13) DRONKE, P., op.cit., p.148, pp.193-195.
- (14) 『頭痛歌』 は、Führkötter, Adergundis, and Angelika Carlevaris, eds. *Scivias*. CCCM, vols. 43-43a. Turnhout, Belgium, 1978 と PL, 197, col. 383-748. 611の版があつて、後者は十六世纪の墨書き本を底本として前者が優れています。最近の翻訳をHildegard of Bingen, *Scivias*, trans. Columba HART and Jane BISHOP, New Jersey, 1990, Hildegard of Bingen. *Scivias*, trans. Buce HOZESKI, Santa Fe, 1986.
- (15) FÜHRKÖTTER, A., *Hildegard von Bingen: Leben und Werk*, BRÜCK, A., ed., op.cit., p.33. マインツ同教座副主教の讃謡は、ユルトガルトの幻視は「古代の預言者」や「大預言のヤヌエラのドモリ到来者」の如きとい一致した。Vita, fol.7vb.
- (16) NEUMAN, B., *Introduction*, pp.12-13.
- (17) ユルトガルトの交流範囲くのやから書簡集である。
- (18) 移転に闇やる處に之にてせ、Hildegard of Bingen: Letter to Her Nuns, AMT, E. ed., *Women's Lives in Medieval Europe*.

al Europe, 1993. pp.233-235.

- (19) 肥沃な土地と葡萄畑を捨て、何故、忍耐な場所にへ
いのから人々は、驚いた。Vita, fol.8vb.
- (20) 資産を全く膨張は死期を感したがハルガルトが修
道女にあてた書簡に「既にレーヴ。Hildegard of Bingen:
Letter to Her Nuns (12thc.), AMT, E. ed., *Women's Lives*
in Medieval Europe, 1993. pp.234f.
- (21) 「温ニサ」修道女の特異が題題であつた。
- (22) 人々は、実現するのかどうかで、邪魔をつく
決心をあつたし、ヒルトガルトは好虚な口悪にひか
れたところであつた。移転くの贅成が得られなか
既に口悪をなんとかしなくなつたヒルトガルト
は、この口悪心が破けた。翌日からヒルトガルトは、
床にうつた。ナント、この場所にうつ眠る、一度も口悪
ふロリやけないし、心地よいと思ふ。心の強さが、心を覆ふ。
DRONKE,P., op.cit., p.150.
- (23) FÜHRKÖTTER, A., op. cit., p.39.
- (24) DRONKE,P., op. cit., pp.154-157.
- (25) NEWMAN, B., Saint Hildegard of Bingen, *Symphonia*,
Itahca and London, 1988. p.6. 『八八八八』 G | 端
『タヌ・タマヌムーメム』 リ 手紙樂奏ケルトヒ
メロ興味音曲アモ。A feather on the breath of God: *Sequ-
ences and hymns by Abbess Hildegard of Bingen*, Gothic
Voices, dir. Christopher Page, with Emma Kirkby, Mar-
garet Philpot, and Emily Van Evera. Hyperion A666039,
recorded in London, September 1981. Musical Heritage

Society selection for 1984. Also available on CD. *Geist-
liche Musik des Mittelalter und der Renaissance*. In-
strumentalkreise Helga Weber, dir. Helga Weber, with
Almut Teichert-Hailperin. TELDEC 66.22387, recorded
in Hamburg, May 1980. *Gesänge der hl. Hildegard von
Bingen*. Schola der Benediktinerinnenabtei St. Hildegard in
Eibingen, dir. M.-I. Ritscher, OSB. Psallite 242/040 479
PET, recorded in Eibingen, April 1979. Hildegard von
Bingen: *Ordo virtutum. Sequentia*, dir. Barbara Thornton.
Harmonia mundi 20395/96, recorded in Germany, June
1982. *Hildegard von Bingen: Symphonie*. (Geistliche
Gesänge). *Sequentia*, dir. Barbara Thornton. Harmonia
mundi IC 067-19 9976 I, recorded in Germany, June
1983. *Music for the Mass by Nine Composers*. University of
Arkansas Schola Cantorum, dir. Jack Groh. Leonarda LPI
115, recorded Feb. 1982. *Hildegard von Bingen und ihre
zeit. Ensemble für frühe musik regensburg*, christophorus-
Verlag GmbH 74584, recorded in Wallfahrtskirche
Violau, 1990. 『八八八八』 G 端 FOX, M., ed.
*Hildegard of Bingen's Book of Divine Works, with Letters and
Songs*. Santa Fe, 1987. 364-393. NEWMAN, B., trans.
Saint Hildegard of Bingen, *Symphonia*, 1988. 『タ
メロ興味音曲アモ。』 『タヌ・タマヌムーメム』 G 小
ルトヒ BARTH, P., M.-I. RITSCHER, J. SCHMIDT-GÖRG,
eds. *Hildegard von Bingen: Lieder*. Salzburg, 1969; Dronke,
P., ed., *The Text of the Ordo virtutum, Poetic individuality*

in the Middle Ages, Oxford, 1970. 180-92. ニハラ・ベイ

ヘーベゼタルな日本がなさる歴史密な羅介やPitra,

pp.496-502. Wilhelm, GRIMM, "Wiesbader Glossen",

Zeitschrift für deutsches Alterthum 6(1848), pp.334-40. リ

アレロ^o ハルダ^o ヒルデガルディス Bingensis Epistolarium.

Edited by L. Van ACKER. Turnhout, 1991 (Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis XCI).

(26) ハルダ^o ヒルデガルディス RIETHE, P, trans. *Naturkunde: Das Buch von dem inneren Wesen der verschiedenen Naturen in der Schöpfung*, Salzburg, 1959; SCHIPPERGES, H. trans. *Heilkunde: Das Buch von dem Grund und Wesen und der Heilung der Krankheiten*, Salzburg, 1957.

(27) ハルダ^o ヒルデガルディス SHIPPERGES, H., trans. Hildegard von Bingen, *Der Mensch in der Verantwortung: Das Buch der Lebensverdienste*, Salzburg, 1972.

(28) ハルダ^o ヒルデガルディス CHENEY, M.G., The Recognition of Pope Alexander III: Some Neglected Evidence, *English Historical Review* 84(1969), pp. 474-97.

(29) ハルダ^o ヒルデガルディス Liber divinorum operum^o SCHIPPERGES, H., trans. *Welt und Mensch: Das Buch der "Operatione Dei"* Salzburg, 1965. リハルダ^o GORCEIX, B.trans., Hildegarde de Bingen, *Le Livre des œuvres divines* (Visions), 1987. ハルダ^o FOX, M., ed. *Hildegard of Bingen's Book of Divine Works with Letters and Songs*, 1987, pp.4-256.

(30) DEROLEZ, A. ed., Guiberti Gemblacensis Epistola, I,

CCCM 66 (Turnhout, 1988), pp.216-57.

(31) Ep.23. CCCM, XCI, pp.61-62.

(32) NEWMAN, B., Introduction, in: M.C. HART and J. BISHOP trans. *Hildegard of Bingen, Scivias*, 1990, p.47.

(33) NEWMAN, B., op.cit., p.47 ; p.53, note 87.

(34) SCHRADER, M., and FÜRKÖTTER, A, *Die Echtheit des Schriftiums der hl. Hildegard von Bingen*, Cologne and Glaz, 1956, LIEBESCHÜTZ, H., *Das allegorische Weltbild der hl. Hildegard von Bingen*. Leipzig and Berlin, 1930; P.DRONKE, The Composition of Hildegard of Bingen's *Symphonia, Sacri Eundiri* 19(1969-70), pp.381-393; Id., Hildegard of Bingen as Poetess and Dramatist, *Poetic individuality in the Middle Ages*, 1970, pp.150-192, 203-231; Id., Hildegard of Bingen, *Women Writers of the Middle Ages*, 1984, pp.144-201, 231-264. WIDMER, B., *Heilsgedächtnis und Zeitgeschehen in der Mystik Hildegards von Bingen*, Basel and Stuttgart, 1955.

(35) NEWMAN, B., Introduction, M.C. HART and J. BISHOP trans. *Hildegard of Bingen, Scivias*, New York 1990, p.48. ハルダ^o ヒルデガルディス『スコラス』『スコラス』『スコラス』『スコラス』「ハルダ^o カルト・ハキハ・ハハハ」『ヒュヌサ』『ヒュヌサ』「ハルダ^o (一九八一年)」「一一一十四頃。ハルダ^o カルト・ハキハ・ハハハ」(一九九一年、講談社)は、後期中世の聖女を代表する女性たちの「聖女」としてハルダ^o カルト・ハキハ・ハハハをあげた上に、聖女の「ハロウカクな女性」が口論的なものであら、聖女たちの

エクスターは、「レザンは精神錯乱やヒステリーや異端や性的異常と接してゐる」と述べてゐるが、ヒルデガルトの幻視はエクスターをもなわなかつた」とがギズールの書簡におこつて明確にされており、池上氏のヒルデガルもあべらむのヒルデガルト神話も眞にへぬ。NEWMAN, B., Hildegard of Bingen: Visions and Validation, *Church History* 54 (1985), p.164. また BUYNUM, C., The Mysticism and Asceticism of Medieval Women: Some Comments on the Typologies of Max Weber and Ernst Troeltsch, Id., *Fragmentation and Redemption*, 1992, pp.53. 78. さすが後期の聖女の体験をもくべくハーバード神秘主義概念を用ひるの問題に注意を促しておき。